

令和4年度全国農業大学校等プロジェクト発表要旨

農業大学校名 埼玉県農業大学校 学科名 野菜学科施設栽培専攻 学年 2年 氏名 ほんだ ひでゆき
本多 秀行

1 課 題

イチゴの太郎苗利用における育苗期の摘葉管理時期の検討

2 課題設定の理由

埼玉県育成品種である通称「あまりん」(埼園い3号)、は平成28年に埼玉県農業技術研究センターが育成した、現在県内外で人気が高まっている品種であるが、イチゴ苗の親株提供量は農家の要望を満たしておらず、栽培希望の生産者に十分いきわたっていない。また現在主流のポット育苗では太郎苗は育苗期間が長くなるため、生産性は期待できないとされた。

以上のことからあまりん苗の必要数確保の一助とするため、新しい管理方法による太郎苗の利用に着目し、以前より少ない親株数で定植苗をまかなうための検討を行った。その結果、育苗期の太郎苗の葉枚数を1.5枚に制限することで、定植苗として有効であることが示唆された。

そこで、今回の試験では太郎苗の葉枚数を制限する時期について検討を行った。

3 実施方法

(1) 供試作物：イチゴ 供試品種：あまりん(埼玉県育成品種 埼園い3号)

(2) 耕種概要：促成栽培(高設栽培) 栽培期間：2021年6月9日～2022年5月2日(育苗期含む)

(3) 試験区構成：1区 定植40日前まで葉枚数を1.5枚に管理する太郎苗

2区 定植30日前まで葉枚数を1.5枚に管理する太郎苗

3区 定植20日前まで葉枚数を1.5枚に管理する太郎苗

慣行区 慣行管理を行う二郎苗と三郎苗

(4) 調査項目：生育調査、収穫調査(供試株数 各区20株)

4 結 果

1株あたりの上物収量において、慣行区と比較すると1区は2.9%低く、2区は10.7%高く、3区は1.0%低いという結果となった。

また収量の推移においては、慣行区と比しても2区が最も安定した収量推移を示した。

5 考 察

1株あたりの上物収量より、定植40日前まで1.5枚の摘葉管理を続けた1区の上物収量が上記の結果を示した要因は、定植40日前という早期に1.5枚の摘葉管理をとりやめたことから、クラウンの肥大に伴い老化根が発生し、1月の初期収量が低下したと考えられる。

定植30日前まで摘葉管理を続けた2区では、最も良い上物収量及び安定した収量推移が得られた。これは2区の摘葉時期が適切であったことから、定植株が慣行区以上に充実したためであると考えられる。

定植20日前まで1.5枚の摘葉管理を続けた3区の上物収量が上記の結果を示した要因は、定植20日前という晩期まで1.5枚への摘葉管理を行ったため、定植後にソースである葉から、本来シンクの力が最も強い花房に光合成産物が向かわずに根や葉の生育に向けられたため、初期収量が低下し、最終上物収量に影響したと推察される。

よって本試験では上述した結果より、定植30日前まで1.5枚の摘葉管理を続けることで、あまりん栽培における太郎苗の利用は有効であると考えられる。